

夜間学校 ニユース

1989年 8月 18日
 四成区秋之茶屋2-8-9
 旅路の里気付
 釜ヶ崎夜間学校

在日朝鮮人・韓国人・中国人の
 指紋押なつ拒否断固支持！
 定住外国人に市民権を！

夏祭り

盛大に開かれる

三角公園にもう一つ便所を

今年も夏祭りが盛大に開かれました。無事におめりた。雨にたたられそうな気配もあつたが、実際に雨が降つたのは最終日のほんとうに終りまじ前、やはり釜ヶ崎の労働者は、日頃のおきな山の良いものが多いことの証として、公園が改装されておめり

の夏祭りだが、それで鬼ヶたこと。公園の中の丸い石の場力けがなく、公園がゲランド的になっており、椅子などで使うには使いにくくなったように思ふ。ヤグラが大きいこと、建てた位置も間隔してゐると思ふが、踊りになると、公園をほぼ

つたこと。やはり、東端まで歩いていくにはマンドウな感じがする。南端は、夜店に近く非常に利用しやすいかたと思ふ。常日頃でも三角公園は利用者が多いのだから、もう一つ便所が必要だろう。

警官の暴行に泣き寝入りしない

すでに多くの仲間が新聞やテレビの報道で知っていることと思うが、四月二十八日に、西成署内で警官から暴行を受けた西成さんから訴えられた暴行は、釜ヶ崎の労働者に対する差別意識があつたので、泣き寝入りはできないこと。八月九日、警官を特別公務員暴行陵虐致傷罪で告訴。大阪府に対して、損害賠償を求め訴えをおこした。泣き寝入りはやめよう！

授業で取り組む「自分史」

高校教諭・矢吹さん「図書館」を計画

生徒に授業で「自分史」を書いてもらっている芝浦工大柏高校の教諭、矢吹浩二さんが「自分史図書館」づくりを計画している。矢吹さんが昨年、授業での教材にと、新聞などを通じて「自分史」の寄贈を呼びかけたところ、四十冊近くが送られてきたのがきっかけ。「寄贈してくれた皆さんの好意をきちんと形あるものにしたい」と考えた。近く自分の勤める高校の図書室の一角に「自分史」コーナーを設けることから、始める予定だ。

「自分史」の授業は、昭和五十五年の同校開校以来、独自の必修教科として実施している。「総合学習講座」の中で、行われている。これ

両親や祖父母から取材

人生のドラマをつづる

まで約三千人の生徒が自分史を書いてきた。原稿用紙三十枚以上という規定を設けているため、生徒たちも初めは「できっこないよ」と悲鳴を上げるが、書き始めると夢中になり、あっという間に規定の枚数を超えてしまうことも多いという。

ある生徒は、「あとがき」で、「最初は三十枚以上を目標に書いていたが、実際に書き始めたら三十枚を超し、四十枚、五十枚と過ぎ七十枚を超してしまった。自分でもこの枚数に驚いている。家族にいろいろなことを聞いて、『自分にもこんな

父母に取材したり、母子手帳や幼いころのアルバムを参考にしたりしながら書き進めていく。なかには、自分の病氣、事故で死んだ父親、障害を持って生まれた兄弟の話など、生徒自身にとっても思い出したくないこと、秘密にしておきたいことを書いている場合も多く、矢吹さんは「こんなことまで打ち明けてくれて、ありがたうという気持ちでいっぱいになる。悩みや

「自分を見つめ直すチャンスだ。精いっぱい取り組もう。自分の今までを振り返ってみて、自分自身を確認する。〇〇△△という人物はどのような道を歩んで来たのか」と、取り組む意識を見いだす生徒もいる。自分の誕生から始まり、そのころの家族や町の様子、遊びの思い出、友人たちとの交流や受験の苦労などを両親あるいは祖

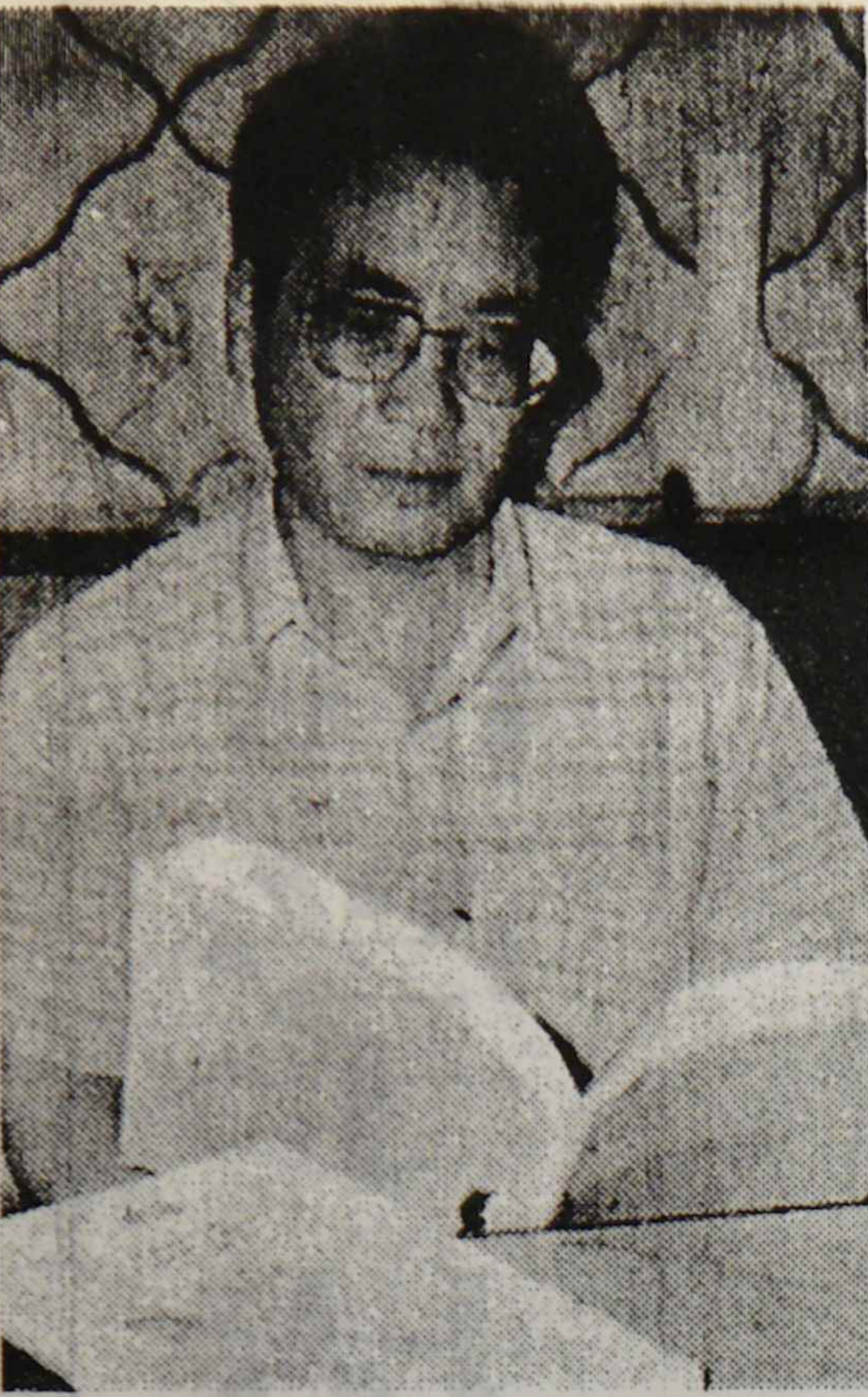
を讀んだから、僕も自分のことを話そう」と、矢吹さん自身の自分史を生徒たちに話す。作の呼びかけにこたえて、「若い人たちの役に立つのなら」と四十冊近くが送られてきた。矢吹さんは、自らの取り組みをつづった札状を送り主に出しており、こうしたやり取りを通じて、交流の場ができていく。その延長として、ゆくゆくは「自分史図書館」をつくりたいと考えるようになったという。

が背景にあるから、ごく普通の高校生の「自分史」でも、決して単調なものではなく、それぞれにドラマがある」と、感想を述べている。一方、こうした「自分史」授業では、「君たちの自分史

かかわりのなかで育ち、生きていく。そのこと「たくさんの蔵書があるから、図書館として成り立つというわけではない。筆者と読者との交流を大事にできる図書館にしたい」といい、目録の整理が出来したい、高校の図書室の一角に「自分史」コーナーをつくる予定だ。

夏祭りでは、死んでいった仲間の追悼集会もあつなわれた。最初は、釜ヶ崎の闘いに、あるいは、山谷や寿の闘いにあつていった仲間を中心とした釜ヶ崎の追悼集会。次いで、キリスト教の、いろいろな家を中心とした追悼集会。様々な考えを持つ人間が集まる釜ヶ崎の夏祭りで、特定の宗教色がでる追悼形式をとることに

1989年8月17日朝日新聞



生徒の「自分史」に目を通す矢吹浩二さん＝千葉県柏市で

習に生かせたらと、昨年十一月以来、新聞などで、「自分史」の寄贈を呼びかけてもみた。この呼びかけにこたえて、「若い人たちの役に立つのなら」と四十冊近くが送られてきた。矢吹さんは、自らの取り組みをつづった札状を送り主に出しており、こうしたやり取りを通じて、交流の場ができていく。その延長として、ゆくゆくは「自分史図書館」をつくりたいと考えるようになったという。

いては、反対する意見もあること思う。しかし、釜ヶ崎の夏祭りが、様々な考えを持つものの集合で盛りあがるものであるなら、キリスト教関係者も、長年釜ヶ崎で活動が続けている仲間であることを考えるなら、そして、ふるさとの家の絆を大切に仲間の力が認められていることを思うなら、その形での追悼も、あってよいもの、容認されるべきものと思われ。さて、お盆を機に、死んでいった仲間に思いをはせるのもよいが、今、生きていく自分自身についても、きこしこしかたを振りかえつて見ることも、また必要ではあるまいか。十五、六才でも自分史をつづれるとすれば、多くの仲間にはもつと語るべき自分史があるはずだと思ふ。